

# 河川環境は良くなったか

(財) リバーフロント整備センター 専務理事 砂川 孝志



私が社会に出た時期は高度成長時代の終期、第一次オイルショックの直前の時期だった。公害問題が社会の大きな課題で、河川についても特に水質の汚濁が著しく、隅田川を行く船に乗る人がひどい臭気のため鼻を押さえている写真に代表されるように、今から考えればそのピークの時代だった。

河川環境の改善はなによりまず水質の改善だった。下水道事業が精力的に取り組み、河川管理者も礫間浄化、浄化用水の導入など水質改善に取り組んできた。その結果水質についてはまだ課題は残るものの当時に比較すれば確実に改善された。

次はいよいよ生態系を含めた河川環境の改善だ。昭和62年から水辺の国勢調査が開始され、多自然型川づくりも始まった。平成9年には河川管理において河川環境の整備と保全を目的とするよう河川法改正も行われた。その後魚がのぼりやすい川づくり、自然再生事業の創設、ダムにおいてもアセスの充実や樹林帯の整備、弾力的運用等様々な施策がとられている。

以前と比べて川は良くなったかと問われれば、これら改善に向けての結果と、もしかしたら様々な要因で環境を悪化させたこととの差し引きということになる。改善に向けては例えば多自然型川づくりが全国で28000箇所も行われてきた。なかには全く効果がなかったものもあるとは思われるものの、少なくとも大勢としては改善されてきただろうと思われる。魚道についても全くなかったところに設置してきたことを考えればトータルで見れば改善されてきていると推定される。一方河道について悪化させる、或いは悪化する事項としては、単調な河岸や高水敷の造成、長年の経過の結果として河道の固定化による単調化や魚道機能の壊失、水量の変化、外来種の侵入等々考えられるものも少なくない。その結果河道内に樹木が繁茂し、一見自然があるようで実は河川が本来持つ環境とは別物の環境となってしまっていることもある。ただトータルとしての河川の生態環境についてはBODのようにわかりやすい尺度がないだけにきれいな形ではでないもののこれまでの努力は決して無駄ではなかったと思われるし、さらに何らかの評価尺度があればと考えている。

一方で環境の変化は人間の社会生活の変化に比べ

スケールが大幅に異なり、一般に長い単位で考えなければならぬ。河道の固定化が長年に渡る河道への土砂流出形態の変化の結果と思われるような、悪化圧力も長年に渡るケースである。ただ壊れるのは相当早い、その回復には相当の時間を必要とするケースが一般的である。そうした点では常にモニタリングをしていくことが必要である。また環境は生態系連鎖だけを見ても実に多岐に渡り、多様な要素が関わり合うという複雑さがある。一方ではまた河川環境は本来自然営力の結果なので自然の治癒力を期待できる、ないしはそれを活用することが本来の自然環境を回復することができるという側面もある。こうしたことから技術的には検討課題はつきないが、そうもいってられないので例えばこの程度まで物理環境を維持できれば、或いは回復すれば後は自然の回復力が期待できるという“しきい値”を探することはできないだろうかと思っている。そしてこれが環境目標の設定の考え方にもつながるし、河川管理もしやすくなるのではないかと思う。

河川環境の尺度という点では“ノスタルジー”があると思う。河川環境に対する市民の満足度評価がまだまだということがよくいわれるが、その尺度として自分が子供の時の川のイメージにどこまで近づいたかがあるのではないか。もちろん臭気著しい時期の隅田川沿川で育った人があの臭気を取り戻したいとは思わないだろうから、子供の時というよりは日本人のDNAにしみこんだノスタルジーがあるのかもしれない。そして現在はまだそこまでは至っていないだろう。

ある程度改善されてきているとしても次のステップに向けて新たな課題、キーワードもでてくる。水循環・物質循環の再生、生物多様性の確保、河川環境への地球温暖化圧力、河川から流域への展開、生態系サービス等々リバーフロント整備センター的な課題も数多い。これらの課題への果敢な挑戦がこれから必要だと思う。例えば今回の特集に即していえば水循環については、鶴見川で水循環の再生を念頭に置いて水マスタープランが策定されたが、こうした動きが全国で展開されることを切に願っている。そしてこの課題は河川から流域への展開とも密接に結びついている。